

湘南の歴史街道を行く「③江の島道」解説

2022年7月10日池内・今井

血なまぐさい関ヶ原の合戦が終わって100年、元禄繚乱の世となってきた。江戸庶民も生活は豊かになり、物見遊山に出かける余裕が生まれて来た。その格好な場所の一つが大山詣である。最盛期の宝暦年間（1750-1763）には年間20万人ほどが参詣したと伝える。

江戸から大山へ行く代表的な道は二つあって、一つは矢倉沢往還大山道（青山通大山道）と柏尾通り大山道がある。墨田川で水垢離をして、納めの木太刀を担いで大山を目指し石尊大権現に参拝する。帰路は田村通り大山道を通り、辻堂の四谷（羽鳥交差点そば）に出て、東海道の藤沢宿に宿泊して精進落しをするのである。翌日は江の島道を通り、江島弁天にお参りして、ついでに鎌倉観光をして、金沢の六浦湊から船で江戸に帰った。私達も藤沢宿から、彼らの足跡を辿りながら、江島弁天にお参りしてこよう。

出発は白幡神社隣の御殿辺公園から江の島を目指す。距離は10kmある。白幡神社の境内、石仏群が置かれている傍らに杉山検校の建てた、江の島弁財天道標（以下江の島道道標と略す）が置かれているから、一目見て出発したい。

藤沢宿を通り抜ける、境川を跨ぐ赤い欄干の遊行寺橋（大鋸橋）が旧東海道です。遊行寺入口の東海道広小路に「ふじさわ宿交流館」が出来たから、街道の資料を入手して出かけた。

遊行寺橋を渡る、藤沢橋際に江の島弁財天への鳥居があったが、交通のじゃまと言う事で、昭和の時代に撤去された。その礎石が遊行寺の宝物館前に置かれている。

江の島道は藤沢橋交差点から100m程先で、国道467号線と別れて右に折れる。この路地には蔵造の建物がのこされており、往古の匂いがかすかに残る。

最近道路整備された遊行ロータリーに出ると、江の島道道標が据えられ、藤沢市の文化財として説明板が掲げられている。道は遊行通りに入る、すぐ左手に庚申堂がある、江戸時代から続くお堂であるが、すでに無住となり、残念だが荒れ果てている。

東海道線が江の島道を横切ったから、道は地下道を潜って石上通り（砥上）に出る。駅前のにぎやかな通りも、セブンイレブンを過ぎれば静かな道となり、砥上公園には最近移された江の島道の道標が建つ。この道標は昔、藤沢市役所への歩道橋の脇にあったが、元の場所に安置された。庚申供養塔も数基残されている。

江の島道はわずかな距離であるが、静かな住宅街を通り抜ける、急な左カーブにさしかかる角に江の島道道標が置かれている、ここは現在大源太公園となっているが、昔はここが境川で、「砥上の渡し」となっていた。流れの一部は蓮池となって残り、鶴沼高校の脇を通り、柳小路駅前から現在の川に注いでいた。ここから川は片瀬川に名が変わる。

今は「上山本橋」で境川を渡る、ミネベアの前を通り、住宅地の間を通りながら、片瀬川の畔を歩くようになる。やがて小さな川に小さな橋が見えてくる、「馬喰らい橋」（馬鞍橋）で、源頼朝がここを通るとき橋を架けたと伝える。2022年春この辺りは宅地造成され、昔の面影は全く姿を消した。

新屋敷橋前を通り、岩屋不動への道を分けると「泉蔵寺」前にさしかかる。江の島道道標や、庚申塔らの石仏がまとめておかれている。密蔵寺先、本蓮寺先にも江の島道の道標が建てられている。江の島道の道標は、48基立てられたと言うが、この辺りには多くの道標が存在している。この先西行戻り松の傍らにも道標がある。

鎌倉時代、西行は法師となって東大寺勧進のため陸奥に向かう途中、東海道からこの道を通り、頼朝に会うために鎌倉へ向かう。文治2年（1186）8月15日頼朝と会う、8月16日吾妻鑑はこう記す、“庚寅午の刻、西行上人退出す。しきりに抑留すといえども、あえてこれに拘わらず、二品（頼朝）銀造りの猫をもって贈り物に充てられる。”

常立寺に立ち寄り、蒙古来襲の元使塚の碑を見るとすぐ、龍口寺への道標を見送って江ノ電の踏切を渡る。賑やかになった「すばな通り」を歩く。すばな（洲鼻）とは陸係砂州（とんぼろ）の昔の言い方で、今でも大潮の日は歩いて島に渡れる。この通りに江の島道への道標がある。道路工事の最中、地中から掘り出されたと言う。

新装なった江の島弁天橋を渡り、寛保3年（1743）木の鳥居建つ、延享4年（1747）青銅の鳥居として建立、文政4年（1821）再建の鳥居を潜って商店街を進むと、江島神社の大鳥居の前に出る、鳥居を潜り階段を上ると福石に出てゴールとなる。杉山検校の墓は、赤い橋を渡って左へ、江の島公民館脇の石段を下る。

完